

「育成会の生みの親」加藤千加子の足跡 —埼玉県における活動から—

大塚 良一

1. はじめに

戦後の知的障害者政策に関しては、一見すると行政によるコロニー政策を中心とする社会福祉施設政策であったと考えられる。しかし、その原動力となったのは行政ではなく、全日本手をつなぐ育成会（以下、育成会という）を中心とする母親の力である。この母親の力が国を動かしていたといっても過言ではない。

戦後任意団体として発足した育成会は1955（昭和30）年2月23日に社団法人全国精神薄弱児育成会として法人化され、知的障害者政策運動^①を行うとともに、施設設置運動が行われていく。その中心となったのが名張育成園（1958年11月9日開園）と鹿島育成園（1961年11月1日開園）である。名張育成園は全国の親の拠金と、お年玉付き年賀はがき寄付金多額配当金2千万円がその基になっている。鹿島育成園は特別競輪益金1千万円と自己資金300万円がその基になっている。両施設の土地に関しては、無償提供されている^②。

法人化された育成会の初代役員は表1のとおりである。

この中に、常任理事として加藤千加子の名前がある。加藤が育成会に関わったのは1952（昭和27）年から1964（昭和39）年の僅か12年間である。当初、育成会は加藤らの呼びかけにより、知的障害児をもつ母親が中心となり、そこに学識経験者などが集まり組織化されていった。

しかし、母親の姿は年々少なくなり、1963（昭和38）年に徳川正子常務理事が辞めてから

表1 社団法人全国精神薄弱児育成会（現社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会）初代役員

役員名	氏名	役職	役員名	氏名	役職
会長	前田多門		理事	菅 修	ひばりが丘学園長
副会長	徳川正子	旭出學園母の会	理事	田中澄子	福岡県育成会
常任理事	花岡忠男	日向弘済学園長	理事	津田正夫	日本新聞協会
常任理事	重田定正	東大教授	理事	小暮和男	第一銀行常務取締役
常任理事	加藤千加子	埼玉親の会	理事	三木安正	東大教授
常任理事	小宮山倭	青鳥中学校長	理事	関屋五十二	東京社会教育協会
理事	糸賀一雄	近江学園長	理事	山際正道	日本輸出入銀行副総裁
理事	岩崎令子	高知県育成会	監事	塙本常雄	明大教授
理事	伊藤幸太郎	楢木親の会	監事	森田本次郎	平和商会取締役
理事	渡辺実	八幡学園主事			

注) 1955（昭和30）年2月23日「社団法人全国精神薄弱児育成会設立」、同年10月12日第一回理事会で役員が決定される。1959（昭和34）年3月25日第一種の社会福祉事業団体として社会福祉法人化される。

は理事長、常務理事は1987（昭和62）年まで、すべて男性へと変わっていく³⁾。

加藤千加子の業績としては、育成会の呼びかけを行った3人のお母さん的一人ということが先行され、埼玉県での施設設置運動や母親の組織化などについては触れられていない。また、加藤に関しての特別な研究・論文なども発表はされていない。

本論では、加藤千加子の業績を振り返り、その上で、加藤千加子の娘さんから埼玉県育成会に寄せられた資料を基に、埼玉県における加藤千加子の活動と思想について考察するものである。

なお、本科研究は歴史研究のため今日では差別的用語として使われなくなった「精神薄弱」や「特殊学級」「養護学校」等の表現を原文のまま使うことをお許し願いたい。

2. 加藤千加子と育成会

加藤に関しては、行った業績に比して残されているもの、引き継がれているものは少ない。加藤を知ることができる唯一の手掛かりは、育成会の機関紙「手をつなぐ親たち」などへの寄稿文と、埼玉県手をつなぐ育成会編集・発行（2002年）「埼玉県手をつなぐ育成会創立50周年記念誌 新しい世紀の育成会活動を目指して」の中に寄せている「特別寄稿 天の命ずるがままに」であり、この寄稿後、加藤は天寿を全うしているため詳細な状況を把握することは難しい⁴⁾。今回、加藤千加子の娘さんから埼玉県育成会に寄せられた資料は引越しのため資料の処分を余儀なくされたため送られたものである。加藤の手元にあった埼玉県育成会の設立経緯が分かるものである。加藤の初期育成会活躍については、表2のとおりである。

育成会は1952（昭和2）年7月12日に東京神田のYWCAで結成準備会が開催されその際、本会の名称を「精神薄弱者育成会」とし、「手をつなぐ親の会」という名称を併用するということが内定され、1952（昭和27）年7月19日参議院会館第一会議室で結成記念大会が開催された。育成会の設立の発端になるのは、東京都千代田区神竜小学校を開設された特殊学級⁵⁾に子どもを預けた3人の親（加藤千加子・諷訪富子・広瀬桂）たちが特殊学級の増設を図りたいという運動からである。この願いは、三木安正（当時、東大助教授）を通じて東京都千代田区役所内の児童問題研究会花岡忠男に伝えられ、神竜小学校で児童問題研究会主催の精神薄弱児を持つ親の懇談会が開催された。この会に、厚生省児童局養護課辻村泰男も出席している⁶⁾。

手をつなぐ親の会結成のきっかけになった出来事について、「手をつなぐ親たち創立十周年記念特別号」（1961年）では、「加藤さんが、結核予防運動について近藤宏二先生にお話を伺ったのがきっかけで、精神薄弱は結核に勝るとも劣らぬ社会的大問題なのに、しかるべき運動がないこと、それは精神薄弱の人々自身には訴える能力がなく、親は恥ずかしがって、人知れぬ苦労を重ねているためであることに気づき、母親が立ち上がりながら誰が立上がるのかと思い立ったのでした⁷⁾」といっている。

このことについて、加藤は、埼玉県手をつなぐ育成会編集・発行『新しい世紀の育成会活動を目指して』の中で、当時の様子を次のように述べている。「婦人雑誌で特殊学級があるのを知ったのが神田の神竜学校なのです。——中略—— そんな頃、次女が肺結核を発生してしまい、長男の東大の親友の兄上が当時ラジオドクターをしておられた近藤宏二医博でしたのでお訪ね致しました。色々なお話を伺って、結核予防運動でご苦労なさったお話を伺ってい

表2 加藤千加子の初期育成会の活動

年	主な活動	年齢
1952（昭和27）年	<ul style="list-style-type: none"> 4月、加藤千加子、諏訪富子、広瀬桂と花岡忠男が東京都内各特殊学級を巡り「親の会」結成を呼び掛ける。 5月22日、神田の小学校で最初の懇談会が開催される。児童問題研究会（運営委員長 花岡忠男）と名乗った。 7月19日、衆議院議員会館にて創立総会「精神薄弱児育成会（手をつなぐ親の会結成）」加藤常任理事となる。児童問題研究会で陳情書作成。 12月6日 YWCA で第一回全国大会（加藤千加子あいさつを行う。） 	48
1953（昭和28）年	<ul style="list-style-type: none"> 3月、NHK の「私の本棚」（ラジオ番組）で「手をつなぐ親たち」を取り上げる。樋村治子朗読。 7月25日第2回手をつなぐ親の大会（東京読売ホール）糸賀「なぐさめあいの会からどうしたらいいのか具体策を推進する会に脱皮しよう」4つの策を発表。千人を超える会衆がある。 9月、全国精神薄弱児育成会結成。加藤千加子、常任理事になる。 	49
1954（昭和29）年 (育成会の動向)	<ul style="list-style-type: none"> 9月23日社団法人全国精神薄弱児育成会発足。加藤千加子、常任理事となる。 忘れられた子らの作品展（東横デパートで開催、30年からは三越本店で毎年開催される） 	50
1955（昭和30）年	<ul style="list-style-type: none"> 2月23日社団法人全国精神薄弱児育成会認可。・7月8日、加藤千加子、常任理事を退任。・7月9日、仲野好雄、専任理事となる。 	51
1956（昭和31）年	<ul style="list-style-type: none"> 3月23日、（から2週間）山下清展と教育と福祉と医療の無料相談。 	52
1957（昭和32）年 (育成会の動向)	<ul style="list-style-type: none"> 1月19日、「手をつなぐ親の会月例会（第一回）」朝日新聞社7階講堂。 7月、陳情書「特殊学級の先生方御苦勞を感謝します」。 	53
1958（昭和33）年 (育成会の動向)	<ul style="list-style-type: none"> 自民党と育成会との懇談会が行われる（5回以上開催される）。 11月名張育成園落成 	54
1959（昭和34）年 (育成会の動向)	<ul style="list-style-type: none"> 3月25日、育成会社会福祉法人となる。 4月、自民党、政府、育成会との精神薄弱者福祉法制定連絡協議会発足。 11月23日、全国大会において理事長交代。前田多門氏から徳川義親となる。（前田が労働協会会長就任を機に辞意を表明）。 	55
1960（昭和35）年 (育成会の動向)	<ul style="list-style-type: none"> 精神薄弱者福祉法制定（3月31日成立）。 11月第一製薬 kk の協賛を得、来日中のパール・バック女子を迎える（福岡以外は録音メッセージ）東京・札幌・福岡・大阪・名古屋で精神薄弱三団体（育成会、全特連、愛護協会）と産経新聞および地方新聞社との共同主催で振興大会が催されました。育成会としては創立以来最大の盛事。 『精神薄弱者問題白書』共編。（日本文化科学社から11月20日刊行） 	56
1961（昭和36）年	<ul style="list-style-type: none"> 11月1日、鹿島育成園開設。 	57
1963（昭和38）年 (育成会の動向)	<ul style="list-style-type: none"> 3月、サリドマイド児の保護者の会結成。 4月、全国心身障害児を持つ兄弟姉妹の会結成。 10月第1回全国精神薄弱施設研究協議会開催（名古屋） 第1回特殊教育学会開催（東京） 	59
1964（昭和39）年	<ul style="list-style-type: none"> 加藤千加子、埼玉県育成会理事長を退任。 	60

出所：埼玉県手をつなぐ育成会編集・発行『埼玉県手をつなぐ育成会創立50周年記念誌 新しい世紀の育成会活動を目指して』2002年57ページから作成。（加藤千加子は1905（明治38）年7月15日生まれで、平成15年に亡くなられている）

るうちに、はっと啓示を受けたのです。私が探し求めていた道はこれだ。全国の子ども達を一度に救うのには、この子等の為に、教育の立法化と福祉法の適応を目指して養護運動を興すしかない。これこそ天が私に与えた天命なのだと確信したのです。勿論先生からは、女の貴女に出来ることではない。そんな無謀なことはおやめなさいとの忠告を受けましたが、私の決意は固く、それならと花岡忠男先生を訪ねるようご紹介下さいました⁸⁾」といっている。また、児童問題研究会については「読売新聞の滝沢記者が特殊教育の取材に見えたのです。——中略——この私の訴えが実って翌日の夕刊の全国版に取り入れられ大きな反響を呼び起こすこととなり⁹⁾、花岡先生を中心に「児童問題研究会」を発足したとある。

結成記念大会について、岩崎令子（1987年）は「この記念すべき発会式に、私は糸賀先生の通知を得て四国からたった一人で参加しました。出席者の中には。安宅家の人々の作者・古屋信子女史、女優の阿里道子さん、徳川正子夫人、東大の三木安正先生を始め多くの知名人が集まっていました。席上、加藤千加子さんが『障害児の現状と対策の急務について』と、体験を通して切々と訴えられました。その後、それぞれのお母さん方からあいさつがありました。子を思う切実な、障害児を持つ親のみ知るつらさ悲しさに満ちた血を吐くような言葉に会場にはすすり泣きが流れました¹⁰⁾」といっている。

この精神薄弱児育成会は設立当初は任意団体で会長は矢木沢善次、理事長は花岡忠男であった。会の発展と共に「社団法人全国精神薄弱児育成会」となり、専務理事に仲野好雄が就任後は国会や行政方面に積極的活動が行われた¹¹⁾。

加藤（1961年）の中央での活動が分かるものがある。『手をつなぐ親たち創立10周年記念特別号』に寄せた、タイトルが「昭和29年9月16日の日誌より」である。その中で、加藤は「今日は渋沢敬三先生の所に顧問にご依頼に行く予定。社団法人になる時発起人をご承諾いただいた節理事も顧問も引受けられないからとお断りされたが、顧問をお引受け頂く事には自信があったので心配はしなかった。——中略——雑踏にもまれながら東京駅に向かうと程なく花岡先生がおい出になり、これから輸出入銀行の山際副総裁（現日本銀行総裁）のところに副会長をお引受け頂くようご依頼に行ってほしいとおっしゃるのでご一緒する¹²⁾」といっている。

また、「その後、幾度かお目にかかりましたが、何時も先を越されての御挨拶に只々恐縮してしまいます」と当時の政財界のリーダーと頻繁に会っていたことをうかがわせている。

3. 埼玉県での加藤千加子の活動

埼玉県での活躍をうかがわれるものとして、1970（昭和45）年6月9日、浦和市別所埼玉県職員クラブで行われた座談会「戦後の埼玉県精神薄弱教育をふりかえって」がある。ここに、加藤は育成会初代理事長として出席している。この中で加藤は親の会の発足のことを話し、「それと同時に埼玉県を歩いたんでございます。県の西川課長さん、新藤先生、ふたば学園の近藤先生、三室の笠井先生、常盤小の荒井先生、福島先生のところもあるきましてご協力いただいたんですけど、あのころのご父兄は、ただ泣いてばかりでございましたね¹³⁾」と色々な関係者と会って広報活動を行っていることを話している。

なお、この座談会で、埼玉県で最初の呼びかけを加藤とともに行った荒井富之元常盤小校長は「加藤さんは、広い範囲の組織を考えておられましたが、われわれのやったのは浦和を

主体にして、形をまず整えようということでした¹⁴⁾」と、加藤の活動構想について話している。荒井に関しては、埼玉県精神薄弱者育成会『やまびこ創立25周年記念大会号』(1978年)で富田正三（当時常務理事）が「浦和市常盤小学校校長荒井富之氏のお計らいで同校福島学級の父兄を基盤とし、県下の知恵おくれの子を持つ親に呼びかけ、大宮市加藤千加子女子を会長とする会が誕生し、全国育成会に繋がりを持つ¹⁵⁾」といっている。

また、埼玉育成会の法人化の経緯に関して、「5年前でございましたか、大きな子どもの授産所を設置していただくよう陳情いたしましたが、施設ができますと、運営は県でやるんではなくて親の会でやるんだということが、それとなしに流れてきたんです。それが会員の皆

表2 加藤千加子の埼玉県での活動

年	主な活動	年齢
1952（昭和27）年	・大宮市手をつなぐ親の会発足。	48
1953（昭和28）年	・1月25日大宮市加藤千加子、浦和市の常盤小学校荒井富之（第5代常盤小学校校長）連名で、県下の親たちあて呼びかを行った。 ・2月7日常盤小学校（現、さいたま市浦和区常盤9-30-9）で発会式。会の名を「埼玉の手をつなぐ親の会」とし、加藤千加子会長に選任。事務所を加藤千加子宅とする。	49
1954（昭和29）年	・9月川越手をつなぐ親の会発足。	50
1956（昭和31）年	・所沢手をつなぐ親の会発足。	52
1957（昭和32）年	・県立精神薄弱者施設の建設が計画され会長奔走。（1957年8月明林学園開所、現在の「あげお」の前身） ・11月8日県へ陳情。 ・11月19日県特殊学級研究会総会に出席して親の会総会を開き、県連合体実現への目標をたてる。	53
1958（昭和33）年	・3月1日 国立秩父学園所沢市に開設。 ・埼玉県川越親の会、養護学校設立基金を積立て始める。 ・11月19日 県特殊学級総会に参加して親の会総会を開き、県連合体実現への目標をたてる。	54
1960（昭和35）年	・職業訓練教室「うらわ技術指導所」開所（現、うらわ学園） ・川口手をつなぐ親の会発足。	56
1961（昭和36）年	・5月20日県連合体として埼玉県精神薄弱者育成会（別名埼玉県手をつなぐ親の会）が創立される。 ・6月3日会長に加藤千加子を決定。 ・10月23日「精薄者援護施設に関する請願書」を埼玉県あてに提出。	57
1963（昭和38）年	・5月21日社団法人埼玉県精神薄弱者育成会として埼玉県知事から認可された。理事長 加藤千加子。事務所を埼玉県庁内とする。 ・11月1日県立花園学園開所（現在の「花園」の前身）。 ・埼玉県育成会鉛筆販売事業実施。 ・川越市立養護学校設立請願。	59
1964（昭和39）年	・加藤千加子、埼玉県育成会理事長を退任。	60

注) 埼玉県手をつなぐ育成会編集・発行『埼玉県手をつなぐ育成会創立50周年記念誌 新しい世紀の育成会活動を目指して』2002年57ページから作成。（加藤千加子は1905（明治38）年7月15日生まれで、平成15年に亡くなられている）

さんの関心を高めるきっかけになりました、いっそうまとまらなければということで法人化しようということになったわけでございます。それから、研究会の田村先生にお願いしまして、全県下に鉛筆販売をいたしまして基本金を作ったり、各支部にある特殊学級に応じて分担金を決めたりして、40年に発足したわけでございます¹⁶⁾」と当時の活動を振り返っている。

これらのことから、加藤が育成会に果たした役割を考察すると、中央では、知的障害の子を持つ母親が全国的な組織をつくるという、ある意味での広告塔の役割を持っており、地方では、育成会の普及ための組織づくりと知的障害児者施設づくりと特殊教育（現：特別支援教育）、養護学校（現：特別支援学校）などの普及のための陳情であった。

4. 埼玉県手をつなぐ育成会に送られた加藤千加子の資料

2013（平成25）年4月3日付で加藤千加子の娘さんから、埼玉県手をつなぐ育成会（以下、「埼玉県育成会」という。）あてに加藤千加子が残した資料が送付してきた。内容的には、転居することになり資料を整理し、その際、目についてものを送付したことである。このことを筆者が知り、埼玉県育成会資料の開示を依頼。資料の閲覧と写真記録等の了承を得る。

写真資料1「入会のおすすめ」は当時のものであり、手書きで書かれている。ここには、育成会の創立が1953（昭和28）年2月6日とされており、会長は加藤千加子、事務所は大宮市桜木町2丁目333番地となっている。事務所の住所は当時の加藤千加子の自宅である。これによると、2月6日に設立され、2月7日常盤小学校（現、さいたま市浦和区常盤9-30-9）で発会式を行っていることになる。写真資料2から4までは「埼玉県手をつなぐ親の会 趣意 会則」であり、1963（昭和38）年に法人化するまでの間につくられたものである。写真資料2「埼玉県手をつなぐ親の会 趣意 会則」写真資料2「埼玉県手をつなぐ親の会 趣意 会則」はほぼ同様のものであるが、事務所の住所が写真資料2では大宮市桜木町2丁目333番地となっているが、写真資料3では大宮市桜木町6の904番地になっている。

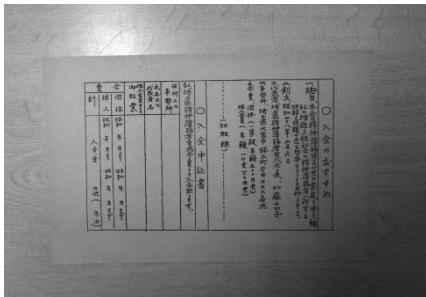
写真資料2は活版であり、写真資料3は手書きになっている。作成年代が入っていないためいつつくられたかは不明であるが、会の発足にあたり写真資料2「埼玉県手をつなぐ親の会 趣意 会則」が作成され、その後、加藤千加子の住所が変更になったので、事務所変更のためつくられたのが写真資料3「埼玉県手をつなぐ親の会 趣意 会則」であると考えられる。1961（昭和36）年5月20日県連合体として埼玉県精神薄弱者育成会（別名埼玉県手をつなぐ親の会）が創立され、6月3日会長に加藤千加子が決定されることから写真資料2はそのころ作成されたものと考えられる。また、同時に社団法人埼玉県精神薄弱者育成会定款が作られている。この定款でも、事務所は加藤千加子の住所になっている。写真資料4は名称を「埼玉の手をつなぐ親の会」になっており、事務所は会長の加藤千加子の自宅ではなく、副会長の大沢秀雄氏の自宅においていることから写真資料3以降のものであり、1963（昭和38）年5月21日社団法人埼玉県精神薄弱者育成会として埼玉県知事から認可された当時につくられたものと考えられる。また、会の設立を1953（昭和28）年2月7日の常盤小学校（現、さいたま市浦和区常盤9-30-9）での発会式にしている。

また、設立の趣旨・趣意については「入会のおすすめ」では「本会は精神弱者及び其の家庭を守り福祉の増進と一般社会の精神薄弱者に対する理解と保護の念を啓発することを目的とする」となっている。それ以降の設立の趣意では表3のとおりであり、精神薄弱児の教育

表3 送付されてきた主な資料

発行年月日	題名	備考
昭和28年2月6日	入会のおすすめ	手書き印刷
昭和29年11月28日	浦和の手をつなぐ親たち第2号	会報（加藤千加子記事掲載）
昭和30年9月1日	浦和の手をつなぐ親たち第2号	会報
昭和30年11月17日	浦和の手をつなぐ親たち第3号	会報
昭和31年9月1日	浦和の手をつなぐ親たち第4号	会報
昭和32年4月20日	手をつなぐ親の会大宮支部発会式御案内	
昭和33年10月1日	浦和の手をつなぐ親たち第6号	会報
昭和33年12月5日	埼玉県精神薄弱児の授産所に関する陳情書	
昭和33年12月5日	特殊学級教員の増員 養護学校設置 特殊教育専門担当指導主事設置に関する陳情書 手をつなぐ親の会名簿	手書き 印刷
昭和34年	大宮手をつなぐ親の会趣意 会則	
昭和35年3月6日	「手をつなぐ親の会」おしらせ	
昭和35年9月25日	与野の手をつなぐ親たち第1号	会報
昭和35年9月2日	浦和の手をつなぐ親たち第8号	会報
昭和35年12月25日	所沢の手をつなぐ親たち第4号	会報
昭和36年	大宮手をつなぐ親の会員名簿	
昭和36年4月現在	精神薄弱特殊学級設置計画に基づく市町村別要設置学級数	
昭和36年6月3日	埼玉県手をつなぐ親の会 常任理事会議題	
昭和36年12月23日	精薄者援護施設に関する請願書	紹介議員 横沼利通
昭和37年4月5日	社団法人うらわ技術指導所	開所式案内
昭和37年6月19日	総会並びに施設視察について	
昭和38年	社団法人精神薄弱者育成会定款	
昭和38年度	飯能第一小学校手をつなぐ親の会会員名簿	
昭和38年5月	「飯能の手をつなぐ親の会」会員募集 趣意書	飯能第一小学校長新井清寿
昭和38年6月10日	御協力方について御依頼	ポールペー販布
昭和38年9月25日	川越の手をつなぐ親たち第5・6号	会報
昭和42年3月11日	新聞切抜き	深谷地方の特殊学級生文集
年代不明	社団法人精神薄弱者育成会趣意書	
年代不明	領収書	
年代不明	埼玉県手をつなぐ親の会 趣意 会則等	手書き印刷
年代不明	埼玉県手をつなぐ親の会 趣意 会則等	活版印刷
年代不明	埼玉県手をつなぐ親の会 趣意 会則等（役員、申込書記載）	活版印刷
年代不明	浦和の手をつなぐ親の会事業の実際	年代不明
	大宮手をつなぐ親の会趣意 会則	手書き印刷
	メモ「埼玉手をつなぐ親の会第一回総会28.11.25常盤小」	

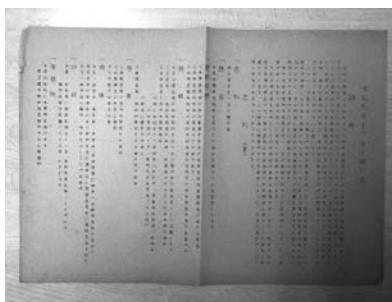
注) 加藤千加子の娘さんから送られてきた資料を筆者がまとめた。



写真資料1
「入会のおすすめ」



写真資料2
「埼玉県手をつなぐ親の会 趣意 会則」



写真資料3
「埼玉県手をつなぐ親の会 趣意 会則」



写真資料4
「埼玉の手をつなぐ親の会 趣意 会則」

表3 手をつなぐ親の会の趣意

知能の発育に欠陥を持った精神薄弱児に対する教育並びに福祉施策に於いて、今日ほとんど下積みになっていてかえりみられていないのが実情であります。

これは基本的人権を尊重するということからも、また教育の機会均等という立場からみても全く坐視するに忍びないことでありますし、その教育、保護、医療の具体的対策と、専門的な研究を早急に実現していくことが今日ほど要望される時はないと思います。

こゝにこの恵み薄い子供らの円満な成長を祈って、日夜苦惱を重ねている親たちが団結して本会を結成いたしました。そしてこの精神薄弱児の最良の生涯のためにその前途に横たわる困難な多くの問題を解決するために共々に熱誠と努力を傾けていきたい決意であります。

即ち本会は精神薄弱児を守り、その福祉を図る事を目的として、その親達が堅く手をつなぎあって発足した団体であります。

本会は埼玉県を地域としての地域的な活動を展開すると共に、中央の全国的な立場の「手をつなぐ親の会」並に全国各地の地域団体と連携して運動を推進いたします。この趣意に御賛同下さる各位によって、本会の目的が一日も早く実現されますよう祈ってやみません。

並びに福祉の向上と親の団結が記されている。

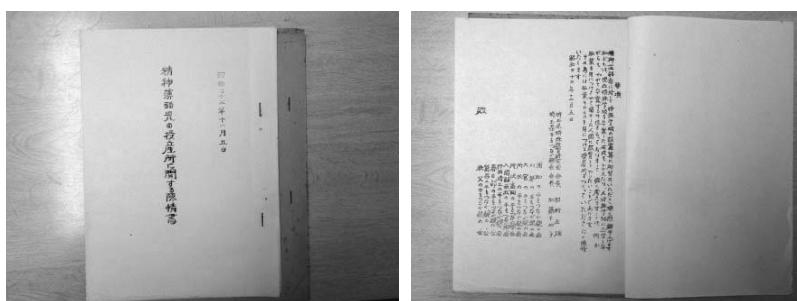
5. 埼玉県への陳情とその内容

手をつなぐ親の会の運動目標については、1953（昭和28）年の設立当初から一貫して1精

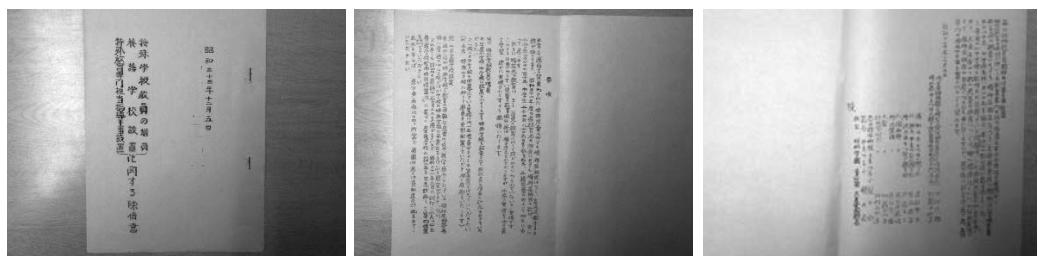
神薄弱児の為の養護学校及び特殊学級設置義務化の速やかな実現、2 精神薄弱児施設の増設及び内容の拡充、3 精神薄弱者福祉の為の法的措置の整備及び職業補導施設の整備拡充の3つを挙げている。また、これらを実現するために様々な陳情を行っている。

1957（昭和32）年県立精神薄弱者施設の建設が計画され11月8日に県へ陳情を行っている。これは 1957年8月明林学園（現在の「あげお」）が開所されているため明林学園に対する要望と考えられる。これに関する陳情の資料は残されていない。

1958（昭和33）年12月5日付で、写真資料4の「精神薄弱児の授産所に関する陳情書」と、写真資料6の「特殊学級教員の増員 養護学校設置 特殊教育専門担当指導主事設置に関する陳情書」



写真資料5 「精神薄弱児の授産所に関する陳情書」



写真資料6 「特殊学級教員の増員 養護学校設置 特殊教育専門担当指導主事設置に関する陳情書」

表4 「精神薄弱児の授産所に関する陳情書」

要項

精神薄弱者に対して特殊学級の設置等に御努力いただき、深く感謝申し上げます。私どもは、現在特殊学級を卒業した生徒をかかえたり、又特殊学級に在学しながらも、やがて卒業する生徒をもっておりまして、強く考えることは、何か職業を身につけさせて独立した人間に教育してやりたいことあります。その為には職業そのものを身につける授産所をつくっていただきたく陳情いたします。

昭和33年12月5日
埼玉県特殊教育研究会会長 田村 正雄
埼玉県手をつなぐ親の会会长 加藤千加子

浦和の手をつなぐ親の会、川越の手をつなぐ親の会、大宮の手をつなぐ親の会、所沢の手をつなぐ親の会、所沢富岡の手をつなぐ親の会、入間郡西部の手をつなぐ親の会、行田埼玉の手をつなぐ親の会、春日部の手をつなぐ親の会、熊谷の手をつなぐ親の会、秩父の手をつなぐ親の会

表5 「特殊学級教員の増員養護学校設置特殊教育専門担当指導主事設置に関する陳情書」

要項

不幸な運命を背負わされた特殊児童の中でも精神薄弱児はろう・盲児比較すると数が極めて多く、昭和31年度の県教育局の調査によても精神薄弱児の数は、実に小学生一万二千七百十名、中学生五千三百八十三名の多数を占め、在籍児童のおよそ四%に当たって居ます。

然るに精薄児の教育はろう盲の教育に比して殆どかえりみられていないのが実情です。このような恵みうすい児童の教育振興策は種々考えられておりますが、本県の実情より次の三点を要望・速やかに実現されますよう陳情いたします。

第一 特殊学級教員の増員

来年度小学校、中学校に設置されようとする特殊学級を調査されて、教職員の増員の計画を立てていただきたい。また、一校において三学級も併設されている学校には、一名増員するよう予算措置をはかっていただきたい。(昨年度特殊学級に対して教員を全部配置していただき深く感謝をいたします)

第二 養護学校設置

普通学級や特殊学級で教育困難な児童生徒や就学猶予となっている精神薄弱児の為、特に普通の中学校では小学校の特殊学級の卒業生をうけいれる態勢ができていない。

又出来ても設備の貧弱や教育上の支障が多いので昭和三十一年六月に施行された「公立養護学校整備特別措置法」に基づく養護学校の設置を至急計画し予算的措置を講じていただきたい。

出来るならば、県下東西南北の四ヶ所案で通園性若くは寮制度の計画を立てていただきたい。

第三 特殊教育専門担当指導主事設置

特殊教育の振興に伴いこの教育専門の担当指導主事の必要性を痛感する。

教育局の調査によても、精神薄弱者 盲ろう、言語障害児の総数は小学校児童三万八千名 中学校生徒一万二千名を数え、全体の一割に近い数を示している。

又普通の小中学校の教師の日夜困っている問題は、この特殊児童の教育方法である。又、来年度より新入児童の検査については、特に標準化された知能検査法によって、精神薄弱者の発見に努める事になりますので、その後の教育措置の為、是非専門の指導主事を置かれることを望みます。

昭和三十三年十二月五日

埼玉県特殊教育研究会（川越市立第三小学校長）会長

田村正雄

埼玉県手をつなぐ親の会（大宮市桜木町六の九〇四）会長

加藤千加子

浦和の手をつなぐ親の会

渡辺幸子

川越の手をつなぐ親の会

吉田青子

所沢の手をつなぐ親の会

工藤マス

入間西武の手をつなぐ親の会

名古屋義治

所沢富岡の手をつなぐ親の会

吉田長吉

大宮の手をつなぐ親の会

加藤千加子

行田市埼玉の手をつなぐ親の会

岡村あや乃

春日部市柏壁手をつなぐ親の会

熊谷手をつなぐ親の会

秩父、明林学園、育心寮、久美愛園親の会

殿

る陳情書」を作成している。「精神薄弱児の授産所に関する陳情書」は1960（昭和35）年に開設された職業訓練教室「うらわ技術指導所」（現：うらわ学園）として実現されている。なお、職業訓練教室「うらわ技術指導所」は社団法人「うらわ技術指導所」（理事長中原き

よ)として、1962(昭和37)年4月16日開所式を行っている。

さらに、「特殊学級教員の増員 養護学校設置 特殊教育専門担当指導主事設置に関する陳情書」に関しては写真資料6であり、内容については表5のとおりである。

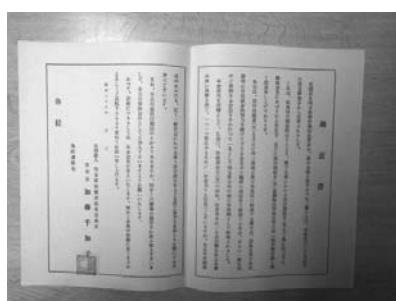
これらの陳情は埼玉県特殊教育研究会会長で川越市立第三小学校校長の田村正雄と連名で手をつなぐ育成会が陳情している。埼玉県特殊教育研究については、津曲裕次(1968年)に「1950年は埼玉県における戦後精神薄弱教育の実質的な出発の年であった。この年、県教育委員会の指導主事として、兼務ではあったが特稼教育をも担当することになった田村正雄氏は、秋の文部省主催の特殊教育指導者講習会に参加する。同講習会には、埼玉大学の先崎正次郎も参加しており、この両者がその後の埼玉県の精神薄弱教育の推進にあたる。まず、両氏の努力によって、9月、埼玉県特殊教育研究会が発足した。同会は、啓蒙・理解の増進を中心に、①、研究協議会を各教育事務所単位に開くこと、②、特殊教育の研究枝を委嘱すること、③、特殊児童、生徒の実態調査の3つを当面の目標とした。その第1次の研究指定校には埼玉小学校特殊学級が選ばれ、具体的な教育内容の研究が開始された¹⁷⁾」とある。

なお、1958(昭和33)年の埼玉県特殊教育研究会のメンバーについては陳情書と共に残されている名簿に記載されている。

加藤の埼玉県における育成会の組織化については、これら埼玉県特殊教育研究会のメンバーにより支えられ進展してきたと考えられる。さらに、それが帰結したのが、社団法人埼玉県精神薄弱者育成会(別名埼玉県手をつなぐ親の会)である。

表6 埼玉県特殊教育研究会《1958(昭和33)年》

埼玉大学	先崎正次郎
県教育局指導課	椎橋筆吉
会長 川越第二小長	田村正雄
副会長 入間郡吾野南川小長	行平晃一郎
副会長 熊谷櫻田中長	夏目米藏
監事 浦和市常盤小長	荒井富之
幹事 浦和常盤小	福島吉郎
常任委員	
浦和 福島吉郎	熊谷 夏目米藏
川口 島根光	所沢 河野早苗
大宮 新井文雄	行田 吉田稔
秩父 黒沢哲	入間 行平晃一郎
春日部 佐久間又彦	児玉 大野政雄
北足立 田村精三	比企 石川浩通
	北葛 石田幸吉
	大里
	南埼 北埼



写真資料7 埼玉県育成会設立の趣意書

表7 埼玉県精神薄弱者育成会「趣意書」

<p>趣意書</p> <p>社団法人埼玉県精神薄弱者育成会、別の名埼玉県手をつなぐ親の会は、本年5月20日正式に埼玉県知事から認可されました。</p> <p>これは、県当局の御高配はもとより、県下全域における精神薄弱者(児)を子弟を持つ方々、特殊教育にたずさわる先生方、並びに精神薄弱者(児)援護施設関係者等の強い御声援の賜と深く感謝申し上げております。</p> <p>本会は、精神薄弱者(児)を子弟を持つ親達が各県各地域に結成する親の会、特殊教育や生活指導に日夜献身的努力を続けてくださる先生方や施設の関係者で結成する各会、さらに一般社会のご理解のある会員を含め打って一丸として埼玉県全体の連合体組織として結成されました。</p> <p>本会結成を契機として、私達は、精神薄弱者(児)の福祉、教育等をめぐる諸問題を社会全体の深い理解を得て、一つ一つ解決するために一層努力する覚悟でございますが、本会の目的達成のためにも、広く一般社会における皆々様の絶大なるご支援ご協力を是非ともお願いする次第でございます。</p> <p>なお、本会の定款は別添のとおりであります、何卒この事業の趣旨をお汲み取り下さいまして、本会の賛助会員としてご加入下さいますようお願いいたします。</p> <p>おつて、詳細につきましては、本会会員が参上いたします。何分御多用中恐縮に存じますがよろしくご高配下さいますよう重ねてお願い申し上げます。</p> <p>昭和三十八年 月 日</p> <p style="text-align: right;">社団法人 埼玉県精神薄弱者育成会 理事長 加藤 千加子 印</p> <p style="text-align: center;">地区連絡先</p> <p>各 位</p>
--

しかし、育成会設立当初は資金が集まらず苦難をしたことが理解できる。それは「趣意書」の中に結成したお礼と共に、賛助会員募集をしているところからも読み取れる。育成会の事務所は当初加藤の自宅としていた。それが、法人事務所を結成すると事務所を埼玉県庁内とした。しかし、当時の県庁職員の話では県庁内といっても、埼玉県庁第一庁舎の駐車場2階であった。また、1963(昭和38)年に資金集めのために行った埼玉県育成会鉛筆販売事業の問い合わせが埼玉県の障害福祉課に殺到したため移転のすることになったとのことである。

6. おわりに

2014(平成26)年6月30日付「福祉新聞」に、「知的障害者の親などで構成する社会福祉法人『全日本手をつなぐ育成会』(久保厚子理事長)が62年の歴史に幕を閉じた。5月末で職員を全員解雇し、6月18日に東京都へ解散の届け出を提出。今後は任意団体の連合会として久保氏が会長に就き、各地の育成会が機能を分担しながら活動を続けるという¹⁸⁾」との記事が記載された。

真田是は国民的規模の運動について「この時期には社会福祉の分野での運動にも注目すべき動きがあった。朝日訴訟が運動化し大きなうねりになったし、児童福祉や障害者福祉の領域でも運動の高揚がみられた。既述の母親たちの保育所増進運動や障害者や家族の組織化の進展があった。言語障害児をもつ親の会(1962年)、心臓病の子どもを守る会(1963年)、全

国重症心身障害児を守る会（1964年）、全国精神障害者家族連合会（1965年）、自閉症児親の会（1967年）などである。これらが社会福祉拡充の原動力になったことはいうまでもない」といっている。加藤千加子が行った育成会の運動はこれらの運動の先駆けであり、手本となつた運動もある。

加藤は育成会の運動を始める時に「全国数十万の恵まれない子どものことを思うとき、せめて私の娘が現在受けている喜びだけでも分けてあげたい。私たちのように無知のため二度とふたたび愛児をこうした不幸の運命におとしたくない。医療機関の設置、知的に応じた職業指導、完全な養護施設など一日も早く完成し、親子ともども安心して生活にいそしめるように、そのために私たち母親のすべてが世間にに対する見栄や思惑をかなぐり捨て、立ちあがり、手をつなぎ世論に訴えるほかに道はない」と覚悟するのです¹⁹⁾」との覚悟を述べている。このような思いが真田の言うように社会福祉拡充の原動力になったことは確かなことだと考える。また、同時に社会福祉という社会が幸せになるための一人ひとりの思いとピアな精神こそが人を動かし時代の根底を築くものだと確信する。加藤の残した足跡が活用されることを願う。

参考文献等

- 1) 法人化された1955（昭和30）年の育成会の目標は、①総合立法、②社会保障による完全保護化、③義務教育制の実施、④自活指導センターの実施であり、これらの知的障害者政策運動を精薄・肢体不自由児義務教育制促進大会（2月、東京）、第一回母親大会（6月）などの開催により訴えている。
- 2) 全日本手をつなぐ育成会『社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会創立50周年記念誌手をつなぐ育成会（親の会）50年の歩み』2001年 58頁。
- 3) 前掲. 2) pp.538～542。
- 4) 全国日本手をつなぐ育成会、埼玉県手をつなぐ育成会に2012年3月筆者確認。加藤の旧住所はマンションになっており当時の姿はない。また、親族に関しても連絡が取れない状況である。
- 5) 神竜小学校（現、千代田区立千代田小学校）1949（昭和24）年11月21日 特殊学級設置。当時行われていた特殊教育については、大南英明（2004年）「特殊学級50年の歩みと今後の特別支援教育」の中に、神竜小学校で行われた特殊教育としては「1 造花の製作作業、花環に使う造花の製作で作業が簡単で、需要が多く、家庭内職として適当であった。製作過程（1）花型の打抜き（2）焼こてあて（3）焼芯付け（4）軸付けの4段階を流れ作業的にやった。2 ミシン縫工作業 3 編物、これらの指導にあたって、造花の売上金は学級費とした。児童には、仕上げた品物については、賃金を学級内発行のお金で支払い、買物、貯金など経済生活の指導をした」（千代田区総合ホームページ「平成24年度千代田小学校学校要覧」）とある。
- 6) 全日本手をつなぐ育成会『手をつなぐ親たち68 創立10周年記念特別号』1991年 8～9頁。
- 7) 前掲. 5) p. 9。
- 8) 埼玉県手をつなぐ育成会編集・発行『埼玉県手をつなぐ育成会創立50周年記念誌 新しい世紀の育成会活動を目指して』2002年 6頁。
- 9) 夕刊記事の見出しへは「精神薄弱児五十万人愛の保護立法を 母心を集結、世に訴う」で3段抜き。「精薄児の母親たちが……この際恥を忍んでも世間に訴えて“母の愛”によりこの不幸な子供たちを救おうと起上」とあり、国会陳情の決意が書かれている。（全日本手をつなぐ育成会『手をつなぐ親たち68 創立10周年記念特別号』1991年 9～10頁）
- 10) 岩崎令子『はちきん母さん一代記』講談社1987年 137～139頁。
- 11) 日本精神薄弱者愛護協会編集・発行『日本愛護五十年の歩み』1984年 71～72頁。
- 12) 前掲. 6) p. 78。

- 13) 座談会「戦後の埼玉県精神薄弱教育をふりかえって」埼玉県特殊教育研究会『戦後の埼玉県精神薄弱教育史』1971年 16~17ページ。
- 14) 前掲. 13) p. 17。
- 15) 富田正三「埼玉県精神薄弱者育成会創立25周年に当たって」埼玉県精神薄弱者育成会『やまびこ創立25周年記念大会号』1978年 12頁。
- 16) 前掲. 13) p. 17。
- 17) 奈良教育大学教育研究所紀要 4巻 津曲裕次「特殊学級（精神薄弱）成立経緯の研究——教育課程論への問題提起——」1968年。
- 18) 真田 是 著『社会福祉の今日と明日』かもがわ出版 1995年 35頁。
- 19) 児童問題史研究会『手をつなぐ親たち:ひかりまつ子ら』日本図書センター 1988年 191頁。